

IV. 第1年次研究のまとめ

本年度は、「個を生かす」学年・学級経営に関する理論研究と、県下各校教師の「個」重視についての意識や条件等の実態調査を進めてきた。

理論面の先行研究については、「個を生かす」という視点からの各教科等に関するものが多く、学年・学級に関するものはほとんどみうけられなかった。この理由としては、次のことが考えられる。

- 「個を生かす」ことが、主として、学習指導面での大切な考え方として扱われ、間口の広い学年・学級経営での研究は進んでいない。

とはいっても、巻末に掲載したように、各学校での取り組みとしては少ないものの、学ぶべき理論書がいくつか刊行されつつある。

それらのいくつかの理論を踏まえつつ、本研究では、冒頭から一貫して述べてきた4つの視点を軸にして研究構想を練り、調査項目の吟味をしてきた。

調査結果については、各領域ごとに顕著な回答の出た設問を中心に考察を加えてきたが、総じて言えば、「個」重視の考え方としてはわかるが、実際には、実施困難な場合が多いということになる。

以下、4つの視点から調査結果を整理し、そのまとめと今後の改善の方向について述べる。

1. 「個の存在を大切にす学年・学級経営」という視点から（設問1～7）

今まで述べてきた考察でもわかるように、「個の存在を大切にす」考えについては、多くの教師がそれぞれに意識して取り組んでいる。（設問1）

しかし、全体的に、積極的な取り組みとは言い難い。特に、小学校に比べて中学校、高等学校が「個を生かす場の設定」や「児童生徒と一緒に過ごす時間」を十分に取れないよ

うである。（設問2～7）これは、主として学級担任がほぼ全教科を指導する小学校と、教科ごとに指導担当の異なる中・高校との違いが要因の一つと思われる。

また、年代別傾向や自由記述（P.24参照）を見ると、20代～30代にかけての若い教師は、「個を生かすことの意義」や「個が活かされている状態」について十分な理解がなされていないようである。（意義等、P.2参照）

これらのことから、各学校において、教職員間の話し合いの場が十分持たれていないため、「個の重視」についての共通理解が図られていないと推察される。

以上のことから、視点1にかかわる改善の方向として、次のようなことが考えられる。

- ① 教育課程一般編等を、学年・学級経営の立場から吟味し、個の願いや目標を学年・学級の目標設定に反映させる。

そのために、

- 「個の存在を大切にす」という立場から、教育目標、学年・学級目標を見直す。
- 「個」の把握のための共通理解を図る。
 - ・ 必要な資料等を確認する。
 - ・ 資料収集の方法、時期、計画を確認する。
 - ・ 資料の分析・整理・活用方法を確認する。
- 集団の目標と個人の目標の調和を図る。

- ② 発達段階、学校規模等を考慮して、個の存在を大切にしようとする意識を高める。

そのために、

- 学年教師の空き時間を週計画の同一時間に位置づけ、「個の存在を大切にす」ための話し合いを、年間通して継続的に